

レジスタンスの歴史を刻むこの土地の人の怒みの鋼
をおもう 石田郁男

ここでの「土地」はフランスの町か村らしい。レジスタンスの歴史とは、戦いの積み重ねの歴史であり、無数の人の歓喜や怒みの堆積である。その硬度、時間に対する耐性を「鋼」と表現している。一首の核になっている。沼の闇負ふウシガヘル電灯の光の中に一步を確かむ

花 美月

今月の一連、旅先の歌だろう。この作、ホテルか旅荘の窓の光がとどく場所のようだ。牛蛙は、食用蛙とも呼ばれる大型の蛙。この一首、その堂々たる存在感をうまくとらえて一首に仕上げている。

近年、牛蛙が増えているのではないか。多摩川に流れ込む野川という川に数匹いて、朝、「ブォーン、ブォーン」という不思議な鳴き声、それも大きな声で鳴いている。五月ごろがとくに頻繁だったように思う。散歩のテオには気になってしかたないらしく、何度も立ち止まって声のする方を見つめていた。

道を説く人を慕ひて書写山に登りし女人を慕ひて登る 荒井公子

姫路の書写山・園教寺を和泉式部がたずねたという説話を踏まえた一首。和泉式部の「暗きより暗き道にぞ入りぬべき遥かに照らせ山の端の月」という有名な一首は、書写山で詠まれたとの言い伝えがある。「慕ひて」を二回使つてうまくリズムをとっている。

十数年昔、書写山短歌大会というイベントが数年つづ

短歌の現在

No.461 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

き、馬場あき子さんと二人で、年に一度、園教寺に通つたのを思い出す。寺へは立派なロプウェイでのぼる。

朝のバス喪服の人がふたり乗り薄墨色の気配ただよ
ふ 庭 博視

喪服の二人のおかげで、ふだんのバスとはちがう空気に支配された、というのが、その空気を「薄墨色の気配」と表現したところが鋭い。とくに「気配」がいい。トリアージの貼り紙してある病院の職員名札はひら

かな表記

齋藤紀久美

新しい題材を詠み込もうとする意欲が読める作。胸につけている名札がひらがなののは珍しい。そこで、自分なりの理由をさがしたら、「トリアージ」の貼り紙があった、というのだ。トリアージとは、災害など一度に多くの患者があるとき、重症度に基づいて治療の優先度を決定して選別を行うことで、ここは指定病院なのだろう。薔薇まどの梓うつしく残りをり半透明のビニール

の向かう

松本実穂

四月に火災があったノートルダム大聖堂の現在をうたう。半透明のビニールがかぶせられていて多少、中が透けて見えるらしい。作者の好奇心がよめる。

お話のおぼちやんと呼ばれ九分を「花さき山」の山姥となる 萩原桂子

「花さき山」は、一九六〇年代の古い作で、名作の評判高い絵本。この一首、具体的な数詞「九分を」によって、はっきりとした作品的輪郭をえた。

さら地には黄色の花がさきみだれ襦袢のやうなミツ